

# 巨樹いしかわ

1989

No. 1



## 目次

石川県巨樹の会発足によせて……県知事…2  
 会長就任あいさつ……里見 信生…2  
 日本一の白峰村太田のトチノキ…里見 信生…3  
 巨樹・巨木林調査について……古池 博…4  
 兼六園・短歌……今井 喜江…5  
 神樹の民俗……小倉 学…6  
 短寸感……加藤 正代…7  
 松門と一里塚の榎(幻の樹木物語)…竹内 城…8  
 能登の巨木と八百比丘尼……加賀 實…8  
 国指定天然記念物……9  
 巨樹探訪の報告Ⅰ……野村外喜子…10  
 巨樹探訪の報告Ⅱ……小谷 二郎…11  
 手づくりの音……森多 幸夫…11  
 百年木運動と巨樹の会……村上 貢…12  
 巨樹と絵画……才田 健治…13  
 山笑う頃……杉江 良治…14  
 映画「老木物語」制作余談……水上 裕規…14  
 投稿規程……14  
 巨樹の会へ入会して……田中 英子…15  
 巨樹は子孫からの預り物……中柴 義威…15  
 巨樹と私……坂井 秀樹…16  
 子供の頃……竹内 虎治…16  
 宝達山のブナ林……広正 一二…17  
 もっと大きかった……上島 保正…17  
 また見付かった巨樹(1)……山口 一男…18  
 一葉より……田中 豊子…18  
 巨樹のQ・Aとお知らせコーナー……19・20

○太田の大トチ 昭和39年2月21日(村指定)

石川県白峰村太田 所有者 織田 寛 嗣

幹周 13.0m 樹高 25.0m (写真 井幡清生)

(題字 里見信生)

本県の貴重な財産である巨樹や老樹を守り後世に残そうと、里見先生をはじめ多くの心ある方々が集い、「石川県巨樹の会」を発足されました。心からお祝いを申し上げます。

悠久の時間によって育まれた巨樹や巨木の林は、すばらしい景観の形成

## 石川県巨樹の会 発足によせて

石川県知事

石川県巨樹の会名誉会長



中西陽一

や、野生鳥獣の営巣の場になるなど自然環境保全上、重要な価値を持つものでしょう。また、信仰の対象や地域のシンボルとして、人々にやさらぎや潤いを与えてくれます。

県庁にもそのシンボルとなる巨樹があります。何百年にもわたり、人々の暮らしを見守り続けてきた「堂形

のシイ」です。私も、県庁正面に堂々たる緑の樹冠を広げるこのシイを見つるたびに、何百年もの過去と未来というスケールで物事を考えねばと、雄大な気持ちがいってきます。

県では、一昨年「百年木運動」を推進していますが、これは路傍や広場に、空一杯に枝を広げる巨樹の立ち並ぶ風景を創

りだそうというものです。今日まで伝えられてきた貴重な巨樹を残そうという「巨樹の会」の重要な仕事と、新たに地域の風景を特徴づけるランドマークを創造しようとする「百年木運動」が、車の両輪となって、豊かな緑にあふれた魅力ある県土を、将来に残したい気持ちであります。

持ちでいっばいでありませぬ。巨樹や老樹の保護は、ふるさとの再認識や郷土愛につながるものです。地域の活力の源になるものだと思います。巨樹への理解を広め、深めるには、地道な努力が要求されるに違いありません。石川県巨樹の会の今後のご活躍を願ってやみません。

## 会長就任あいさつ



石川県巨樹の会々々長

里見信生

石川県巨樹の会が、全国にさきにかけて設立されましたことは喜ばしいことであり、また誇りに思う次第であります。しかもその初代会長を仰せつかり、誠に光栄に存じます。

会長といたしましたは、総会でご審議いただいた本会の設立の趣旨に沿って、微力ながら努力していく覚悟をしている次第であります。どうか会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

さて本会の設立に当り、県内の皆様から早く作れという大変な励げましのお声がありました。そして設立総会には、会員の実に半数以上の方々のご出席があるという非常なご熱意でありました。本会の運営につきましては、徐々に活動を盛り上げて活発にしかも大きくしていくようにしなければならぬと思っております。とかく世間では泡沫会と称し、最初から手を揚げすぎてすぐ息切れして潰れるような会をよく耳にします。このよ

うであってはならぬと自戒する次第です。

次に、巨樹の会は前述のように全国にさきかけて創立されましたが、富山県から早速設立についての問い合わせがありました。いずれ設立されることと存じますが、本会の設立が刺激となって各県でも次々と組織され、全国の巨樹の会になってゆげばと思う次第であります。

最後に申し上げたいのは、自然保護の問題であります。当然この会も何らかの形で県の自然保護問題にかかわらざるをえないと思っております。これについて、特に注意したいこととは、巨樹を守りたいということだけで、そのために管理者の方と争うのではなくて、根気よく話し合いにより解決してゆくように心掛けることが肝要と考えます。

このことを特に申し上げてごあいさついたします。

日本一の白峰村太田のトチノキ

里見 信生

私は、昭和五十七年「石川県の巨樹」を編集したが、その資料に、その後の資料を加えて、全国のトチノキの巨樹を表にした(目通りの幹周が一メートル以上のもの)。

この表で見られるように、本県の白峰村大道谷のトチノキの巨樹(通称太田のトチノキ)は、国の天然記念物に指定されている四本のどれよりも大きく、わが国最大のものであるにもかかわらず、天然記念物としての扱いは、村指定に過ぎない。私は、前述の書を執筆する間に、このような矛盾した例を多く知った。それ故に、序文に「本県下には、巨樹が未だ多数残されていて、他県にくらべ、決しておとるものでないことを知り、嬉しく思う。しかし、他県



吉野谷村中宮のトチ 水野照憲氏撮影

と比較しつゝ、記述して行くと、巨樹に対する保護の施策、例えば、天然記念物指定に限ってみても他の都道府県より遅れがあるように見える。これは真に残念なことで、編者は、この点を関係諸機関の各位に喚起を促す次第である」と書いています。 実際この文は、七年後の現在でも何等変っていない。トチノキの巨樹では、この表に石川県のものが、七本も出て来ていて、他県よりも多く、前文のとおり「本県下には、巨樹が未だ多数残されていて、他県にくらべ、決しておとるものではない」であり、「天然記念物指定に限ってみても他の都道府県より遅れがあるように見える」である。

私は、「太田のトチノキ」を、国の天然記念物に昇格させる努力を果さねばならぬと思っている。 「石川県巨樹の会」は、発足して間もなく、呱呱の声を挙げたばかりであるが、既に会員数二百二十四名で、二百名を越している。これは、県民の巨樹に対する関心の高いことを示しているものであり、各位の御声援により、このような不合理な点を是正していくことを、本会の活動の中に加えたいと思っている。

全国トチノキの巨樹一覧

単位メートル

順位	所在地	樹高	幹周	備考
一	石川県石川郡白峰村大道谷	二五・〇	一三・〇	村指定
二	長野県上伊那郡長谷村非持	三〇・〇	一一・〇	県指定
三	富山県東砺波郡利賀村東山	二〇・〇	一一・〇	国指定
四	福井県南条郡今庄町	二〇・〇	一〇・〇	国指定
五	広島県比婆郡西条町熊野大畑	三〇・〇	九・六	国指定
六	石川県石川郡吉野村中宮途中谷	二五・〇	八・六	県指定
七	長野県木曾郡川村村贄川	二五・〇	八・五	県指定
八	山梨県北巨摩郡須玉町日影	二七・〇	七・八	県指定
九	兵庫県美方郡美方町小長迫(コナカタワ)	二七・〇	七・六	県指定
一〇	静岡県駿東郡小山町上野	四〇・〇	七・二	県指定
一一	兵庫県豊岡市畑上	二〇・〇	七・二	国指定
一二	長野県岡谷市湊六町銚枝神社	三〇・〇	七・〇	市指定
一三	山梨県南巨摩郡身延町高住安住房	二五・〇	七・〇	県指定
一四	大分県竹田市神原(コウバル)	三三・〇	六・四	県指定
一五	山形県最上郡最上町富沢	三三・〇	六・三	県指定
一六	岐阜県吉城郡河合村新名	三一・〇	六・三	県指定
一七	青森県三戸郡階上村赤俣内	二七・〇	六・〇	県指定
一八	奈良県吉野郡天川村清浄大橋	二五・〇	五・九	村指定
一九	石川県石川郡吉野谷村中宮笠中宮神社	二五・〇	五・六	村指定
二〇	岐阜県吉城郡古川町黒内	二五・〇	五・五	県指定
二一	神奈川県足柄上郡山北町瀬政神社	二五・〇	五・三	県指定
二二	奈良県吉野郡黒滝村鳥住八幡神社	二二・〇	五・一	国指定
二三	富山県東砺波郡利賀村脇谷	二二・〇	五・〇	国指定
二四	石川県石川郡白峰村チブリ尾根	二五・〇	四・七	県指定
二五	神奈川県足柄上郡山北町	二五・〇	四・七	県指定
二六	奈良県吉野郡黒滝村鳥住八幡神社	二五・〇	四・七	県指定
二七	栃木県塩谷郡塩原町御殿八幡神社	二五・〇	四・六	町指定
二八	奈良県吉野郡上川村上多古林道	二四・〇	四・六	町指定
二九	福岡県田川郡添田町英彦山神社	二四・〇	四・五	県指定
三〇	宮城県白石市福岡蔵本鎌先	二一・〇	四・五	県指定
三一	愛知県北設楽郡津島村鞍船	二七・〇	四・三	町指定
三二	石川県江沼郡山中町杉水町	一四・〇	四・三	町指定
三三	奈良県吉野郡天川村清浄大橋	二二・〇	四・三	町指定
三四	広島県比婆郡西条町北村神社	一九・〇	四・二	町指定
三五	長野県諏訪市中洲中宮寺	三三・〇	四・一	町指定
三六	石川県石川郡鶴来町八幡町八幡神社	三三・〇	三・八	町指定
三七	石川県鹿島郡鹿島町石動山	三〇・〇	三・三	町指定

## 時事解説

## 巨樹・巨木林調査について

古池 博

## 巨樹・巨木林の価値と

## 調査の緊急性

環境庁は昨年度、すなわち一九七八年度（昭和六三年度）の事業として、全国にわたる巨木の調査を実施しました。これは日本では最初の試みで正式には「第四回自然環境保全基礎調査、巨樹・巨木林調査」といいます。

巨木は従来も天然記念物として指定・保護されるなど必ずしも軽視されてきたわけではありませんが、その場合には「学術上価値が高い」文化財としての位置付けに限られていました。今回の調査は巨樹・巨木林の価値を、(一)自然環境保全上の価値（良好な景観の形成、野生鳥獣の場など）、(二)学術的価値（古気象等の研究素材など）、(三)生活環境保全上の価値（地域のシンボルとしてひとびとに安らぎと潤いをあたえるなど）の三つに置き、より広い視野から意

義付けているのが特色です。

そのように重要な価値を持つ巨樹・巨木林が、実態が不明なままに近年急速に失われつつあるので現況を全国的に把握しようというのが今回の調査目的でした。

環境庁は調査の効果として、巨樹、巨木林ならびにそれらの生育環境（保全対象）が明確になり、保全区域などの指定制度、環境アセスメント、ナショナルトラストなどによる保全が促進されるとし、波及効果として自然保護への関心を高めることと地域振興への寄与をあげました。

## 巨樹・巨木林の定義と

## 調査内容

今回の調査で巨樹というのは、胸高幹周（高さ一三〇センチでの幹の胴回り）が三〇〇センチ以上のもの、一三〇センチの位置で幹が複数に分かれているものでは胸高幹周の合計が三〇〇センチでかつ主幹が二〇〇

センチ以上のものをいい、巨木林というのは巨樹及びこれに準ずる樹木が複数生育しているものをいいます。「巨樹に準ずる樹木」というのは二五〇センチ程度のものを指します。巨樹・巨木林（調査対象）は一件ごとに全国通しのコード番号があたえられ、単木、樹林、並木のいずれかに分類されます。この意味では、今回の調査は巨樹の毎木調査ではありません。しかし調査者が手数さえかければ調査票番号を使用して巨木林の毎木調査もできるように設計されていました。

調査は位置・測樹などのための現地調査が基本で、文献調査・ヒアリング調査も補完的に認められています。調査結果は一件ごとに「巨樹・巨木林調査票」に記録され、また、「巨樹・巨木林分布図」（縮尺 五万分の一）にコード番号が記入されました。調査項目は基礎的項目（位置・測樹データなど）、生態的項目（環境・健全度・関係の動植物など）、人文的項目（伝承・故事・信仰・利用など）、保護の項目（保護制度の適用状況など）、その他の項目の五大項目で記入欄が一〇〇前後あり、かなり手数のかかる複雑なものでした。技術的には林学の測定法に準じていますが少し違う点もあります。たとえば、林学のほうでは幹周の測

定に際してはより正確な材積査定の見地から節や瘤がある位置では上下を測って平均するのが普通ですが、これは今回の調査の趣旨からすると適切ではないので環境庁の調査要綱を画一的に適用して測定が行われました。

## 石川県での調査と結果

石川県では、自然保護課の担当となりましたが、樹種の植物学的分類と野外調査に熟練した相当数の調査員を必要とするため、「石川植物の会」（会長 浜野一郎）に調査を委託しました。石川県植物の会では里見信生元金沢大学教授を総括者とし、県内を七つの調査区域にわけて北から寺下友三郎、小牧旌、山森茂、古池博、米山競一、浜野一郎、堀野末男の各氏をそれぞれ調査区域の責任者、会員を主力として四一名の調査担当者を調査区域ごとに組織して調査を実施しました。調査にあたっては、各市町村ならびに教育委員会、林業事務所、森林組合の各団体をはじめ一般県民から情報ならびに便宜の提供など、多くの協力をえました。調査結果は巨樹・巨木林の件数が九二三件、内訳は巨樹が四一四件、樹林が五〇四件、並木が五件でした。実測された巨木（巨樹の要件を満たすもの）の本数は一、七五三本で一

応根拠のある推定巨木本数は二、三  
八三本(白山などの推定不可能な数  
字はふくめない)となっています。  
市町村別では金沢市が巨樹三九件・  
巨木林六四、合計一〇三件でもっと  
も多く、ついで加賀市の巨樹三二件・

石川県の巨樹ベスト二〇

(注 主幹の大き順)

No.	樹種	幹周cm	樹高m	所在地	保護制度等
1	トチノキ	一三〇〇	二五	白峰村 太田 大道谷	村天然記念物
2	スギ	一一六五	四二	金沢市板ヶ谷 八幡神社	市天然記念物
3	イチヨウ	一〇八七	一五	七尾市庵百海 伊影山神社	市天然記念物
4	タブノキ	九八二	二〇	羽咋市鹿島路 森の宮	市天然記念物
5	イチツウ	九八〇	三五	尾口村瀬戸 瀬戸神社	村天然記念物
6	トチノキ	九五〇	二〇	吉野谷村 途中谷上流	白山国立公園
7	スダジイ	九〇六	一八	中島町小牧 白山社	
8	スギ	八九〇	三六	山中町栢野 菅原神社	国天然記念物
9	スダジイ	八六〇	二二	加賀市小坂辻馬廻場 十村屋敷	市天然記念物
10	スギ	八四〇	三四	能都町鶴川 桜木神社跡	町天然記念物
11	ケヤキ	八三〇	二五	金沢市野町 神明宮	市保存樹
12	タブノキ	八一〇	一〇	富来町大福寺 高爪神社	町天然記念物
13	ケヤキ	七八二	二七	七尾市飯川 飯川神社	市天然記念物
14	ヤマザクラ	七八一	八	金沢市寺町 松月寺	国天然記念物
15	スダジイ	七八〇	一一	金沢市広坂県庁前 <sup>2*</sup> (七五)	国天然記念物
16	ケヤキ	七六〇	三三	松任市上栢野 楡本神社	市天然記念物
16	タブノキ	七六〇	二〇	珠洲市宝立助政 日枝神社	氏子の自主管理
18	ケヤキ	七五六	三二	金沢市平等本町 八幡神社	氏子の自主管理
19	スギ	七五〇	三九	鳥越村五十谷 八幡神社	氏子の自主管理
20	スギ	七四〇	四〇	山中町菅谷 八幡神社	国天然記念物
20	スギ	七四〇	三五	輪島市石休場 伊勢神社	市天然記念物

注 幹周欄の数値は、地上1・3mの高さでの幹の周囲の長さ

(何本かの幹に分かれている場合は、最も太い幹の周囲の長さ)

1\* 複数のスギがくっついたものである可能性がある。

2\* ( ) の数値は、分かれた複数の幹の周囲(地上から1・3m)の合計。

巨木林四一件、合計七二件となっています。少ないほうでは内灘町の巨樹一件のみが記録されました。表に今回の調査データにもとづいて県自然保護課がまとめた「石川県の巨樹ベスト二〇」を掲げました。

調査の評価など

石川県では、すでに里見信生元金沢大学教授のイニシアチブで、樹種ごとに県下の巨樹についての基本的な調査が実施され、その成果として里見信生・鈴木三男(編)「石川県の巨樹」(一九八二年・石川県林業試験場発行)が刊行されておりました。そのため、今回の調査はこれを手がかりとすることができ、他の都道府県に比較してより綿密な成果がえられたと思います。ただし、今回の調査は先に述べた通り、巨樹の定義が画一的で結果的に大きくなりやすい樹種だけが選抜されること、調査期間と費用がきわめて限定されていたため調査担当者の良心と自己犠

牲の発揮にもかかわらず、白山山系など高峻な山地をはじめ調査のできない地域や調査もれがあること、などの点で、まだ不十分であるとの批判は免れないところです。それにもかかわらず、県下の巨樹が全国的な位置づけのなかで、統一的多面的に調査された意義は大きく、それ自体として大きな資料的価値を持つものです。さらに前述の樹種別の「石川県の巨樹」と併せて利用すると、足りない樹種を補うことができると、足るなどさらに価値が高いものとなるでしょう。データは解析が始まったばかりですが、金沢市街地域での巨木の消滅が進行していること、巨木の樹種・個体数分析から潜在植生の推定の可能性が明かにされるなど、すでに有益な情報が得られつつあります。また調査の過程で興味深い知見も得られています。次の機会に紹介したいと思います。

(金城高校教諭)

兼六園

今井喜江

満開の兼六園の菊桜巨樹の会へのはなむけなりや

巨樹の会祝ふがごとし菊桜盛りに咲けりみどりの日今日

松大樹桜も大樹兼六園みどりの日今日のさはやかなる風

真弓坂のぼれば一瞬明るみてマユミの若葉揺るのどけさ

陽の光深く宿して耀へる樺大樹の若葉は眩し

# 神樹の民俗

## ― 神木に鎌を打つ祭り ―

小倉 学

能登半島の諏訪神社には、本殿がなくて神木や霊石を祭るところがある。祭日は八月二十七日で、次のごとく神木に鎌を打込む儀礼を伝える神社があつて注目される。

### ① 鎌宮諏訪神社（鹿島郡鹿西町 金丸）

金丸の正部谷（約九〇戸）の氏神で、集落の中にある。タブの古樹を神木として建物はない。私は昭和二



七尾市日室の鎌打ち  
（昭和35年8月27日撮影）

十七年から五度にわたつて神事の推移を觀てきた。大きな変化は、神木のタブが枯れたので上部を伐つて保存し、傍らのタブを新しく神木としたことである。旧神木は、大正十四年の報告書によれば、地上五尺の幹回りが一丈七尺四寸、樹高一五間、枝張が東西一五間・南北一三間、樹齡が約四百年といわれる巨樹だった。八月二十七日は、神木前方の地上にゴザを敷き、坐礼で神事を営む。神饌とともにシデ及び稲穂をつけた

二丁の左鎌を供え、宮司が風鎮めのノリトをあげ、神酒をいただいでから鎌打ちの儀となる。当番の代表が神木に梯子をかけ、シメナワを張つてから鎌の柄の方を幹に打ち込む。続いて枯れた旧神木にもシメナワをかける。白っぽくなった樹膚には鎌の刃がたくさん残り、癒合してコブ状を呈し、数百年にわたる信仰の痕をとどめている。

鎌は、ムラの旧家として知られる山辺家が奉納する定めである。近年は小さく長さも一五センチばかりとなったのは、神木の保護を配慮したからだという。鎌打ちの由来は、諏訪明神が鎌をもって化鳥や毒蛇を退治した神功をかたどるのだと神社の記録にみえる。一般の文献では、安永六年（一七七七）の『能登名跡志』に、

神木のたびの木に、氏人、新しき鎌を打込也。此鎌、次第に木中に入て節と成也。  
とあるのが古いであろう。

### 二

② 住吉神社（鹿島郡鹿島町藤井）  
藤井は七尾東往來に沿う六五戸の農村で、もとは山麓に諏訪社があった。建物がなくてヤマサカキを祭り、八月二十七日の風鎮祭には鎌打ちをした。明治四十年（一九〇七）、現

在の住吉神社に合併されたが風鎮祭は続け、祭典後に住吉神社境内のタブの老樹に鎌を打込んでいる。

昭和六十三年は二・五センチの左鎌にシデをつけ、まず宮司、次に区長が鎌の刃先を樹幹に打つていた。合併した諏訪社の旧儀を継承するのは珍しく、いかにも能登らしい。

③ 諏訪神社（七尾市江泊町日室）  
日室は崎山半島の中央にある山間のムラで、調査に訪れた昭和三十五年は一三戸、同四十三年には一〇戸となつていた。神社は諏訪山の頂上の叢林にある。建物はなくてタブの古木と神石とを祭つてきたが、戦後、宗教法人法の関係から前方に拜殿を建立した。

日室の風鎮祭は、①②よりも古色を伝えていゝ。まず八月二十五日に、七尾から「権現迎え」をする。七尾の鍛冶にうたせた雌雄二丁の鎌を、七尾大地主神社でお抜いをうけ、鎌を神御幣につけて帰村する。これをムラの開祖といわれる左近次郎家の屋敷跡地に奉斎し、若衆が二日間守護するのである。

八月二十七日は宮司が来村。神御幣の鎌を諏訪山の神社に奉遷して風鎮祭をおこなう。宮司から鎌を授けられた左近次郎家の者が、神木右方の老タブに雄鎌を、左方の老タブに雌鎌を打込む。鎌は約一七センチ、

魚形を呈して目・口・鱗・を陰刻するが、これは後代の変形であろう。老タブには夥しく鎌がさびついているのは往昔の鎌がさびついているのをみると、畏ろしいような感じにうたれる。

## 三

上記の三例は、能登の古い諏訪神社で、二百十日を前にしておこなわ

## 短寸感

加藤 正代

れる風鎮祭にともなう儀礼である。

諏訪神社の根本社は信州の諏訪大社で、全国に分社が五〇八九社、小祠をいれると一万を越すという。能登の諏訪神社は信州の大社の風儀を伝えたとくに特徴がある。すなわち上記の三社にみられるごとく、大社に倣って本殿を設けず神木を祭り、大社の御射山祭の八月二十七日をもって祭日とするのみならず、風神の信

仰をも伝える。

とくに看過できないのは、諏訪明神のシンボルである薙鎌を打つ伝統を継承している点だ。「権現迎え」と称して鎌を迎える③の事例によってもわかるように、鎌には神霊が籠められているのである。その鎌を毎歳打込むことよって神木はよみがえり、明神は光をいや増して地域を守護してくださるといのが前代の

信仰だった。

したがって神木に鎌打ちするのをみて、感傷的疑問をいだくのは正しいとはいえない。神木はこれよって復活し、人びとは仰いで神木を護持してきたのである。神・樹・人が一体となるところに日本の伝統が存するのである。

(石川県文化財保護審議会委員・文学博士)

私の奉職する神明宮の境内のほぼ中央に、長き年月風雪に耐えぬいた御神木の、北陸一の「大げやき」がある。樹齢何んと約千年ともいわれる。幹回り約八メートル(樹高一・五メートルのところ)、子供等十人が両手を広げてやっと一回りの太さである。道路より少々奥まった所にある故か、金沢に長く住まわれている方でも気が付かぬ事も多い。その根は犀川の水を吸い、一方では、野町広小路の下まで及ぶという。祖母などは、地震の際には、御神木の下へ行くようにと教えていたと聞く。普通の逆であるが、それ程、根が強固であるという事であろう。

秋から冬にかけて、落葉した時に見上げると、相当に高い所に(樹高は二〇メートル以上)大きな鎖が枝分れた幹同志を縛ってあるのが目にはいる。江戸時代の末期に、近くでの大火の吹き込み熱風により、枝と枝との間が少し裂けたため、当時犀川大橋の下の船溜の船止め用の鎖を用いて巻いたもので、長き年月の間には今では幹にくい込んでいます。神明宮前の野町広小路より犀川大橋に至るならかな坂を、古来より、「神明坂」または「カメ割り坂」と言う。その昔、義経・弁慶主従が奥州へ下る際、大切な物の入ったカメを弁慶が誤って落して割った事

に由来する。また、室生犀星が幼年期、すぐ近く裏手の雨宝院で過した故、神社裏手の石垣等の事が、その作品中にしばしば出て来るが、境内は犀星の格好の遊び場でもあったろう。更に天才狂気詩人といわれた中原中也も幼年期、寺町に住んでおり、当時、神明宮のこの大げやきの横の常設してあったサーカス、見せ物小屋で遊んだ記憶を基にして、後に作られたのがあの「サーカス」という詩である。その大げやきは、義経、弁慶や、犀星、中也にも、やさしく温かく微笑んでいたであろう。

晩秋時、市内各地より多くの人がこのげやきの葉を集めに来られる。葉を腐らして堆肥としたものが、菊その他諸々の栽培に最適だと、その方々から教えられた。「トラは死して皮を残す」の例えの如く、落葉してもまた、その葉が別の生命の宿りに輪廻している事を考えると、やはりまさしく延命長寿のシンボルの「御神木」であると思う。木を見るにつれ、常々、神社経営を考えるに、木の幹と葉の關係に類似している様に思われてならない。幹という神社の根幹部分は変わらない。色具合、形、位置等々、微妙に異なるように、その時代に合ったものへと変化をしなければならぬ部分が多々あると思う。(時代に迎合するという意味ではなくて)そうしなければ、その時代に生きていく神社とは言えないかもしれない。諸々の事を考えさせていただけの御神木に対して、一番近くで、その季節折々の変化を目にする事の出来る私は、幸福者であり、また、その責任も重い。

(金沢市野町、神明宮宮司)

## 幻の樹木物語 (1)

## 松門と一里塚の榎

## 竹内城

石川郡御供田村(現金沢市神田町)

の十村役土屋又三郎が、元禄期の農事曆を農耕風俗を交えて体系的に描いた「農業図絵」(鶴来町桜井健太郎氏所蔵)がある。この絵図には金沢の南端、今の二万堂、有松あたりの民家の屋根を越す北陸道の松並木があり、民家はまばらである。やがて松並木も見られなくなり、板ぶきに屋根石を置いた民家があらわれ、桶屋や茶店らしいのがみえる。それが掲載の図絵で、絵の右端に通りをはさんで優美な形の松が、二本みられる。これが松門である。郡部と市中との界標で、もとは町家の前に小松一株を植えたのがはじまりで、そこに門戸を構えたことから松門の名が生じた。

ここから市中、ここまですが郡部ということで、他国の大名や旅行中の諸士が城下へ入る場合、松門から供連れの行列を立直し、また通り抜けたあとは、行列をゆるめるのが慣例で城下町の総門的役割を果たしていた。この松門は上口が泉新町の一五九番地(現泉一―一六―一)、下口が春日町五丁目の街端で、旧の三五、三六番地(現一〇―一五)にあたり、廃藩後伐採されたという。

この場所が、現在の番地の上から特定できることは、まことに興味深く、現在の金沢市のただずまいに、二百数十年前の町並みを二重写しにしてみることができ。

次に、絵の左端にこれも通りをはさみ、大きな盛り土の上に老木が二本描かれている。これはいわゆる一里塚で、道路の両側に塚を築いて榎を植えたものである。冬場のことで葉はない。これを別名一里山ともいい、慶長九年(一六〇四)に設けられたといわれ、金沢市内に二カ所あった。上口では野町六丁目と泉町の境界で、泉町一番地、二番地(旧



農業図絵の松門と一里塚

国道が新道と合わさるところ)に、下口では山ノ上町三丁目六番地、六十二番地にあったといわれる。塚はしだいに民家の間にとり囲まれるようになってこわされ、わずかに残ったものも明治九年(一八七六)官命

## 能登の巨木と八百比丘尼

加賀 實

私の郷土の鹿島郡中島町宮前の、延喜式内社久麻加夫都阿良加志比古神社の境内に「宮前の大杉」という老杉がある。この杉には、若狭の八百比丘尼が植えたという伝説がある。この外にも能登のあちらこちらに、八百比丘尼の伝説が残っている。

若狭の八百比丘尼は熊野信仰と関係があって、昔、村々を回って歩いた熊野比丘尼によって語られたものと思われる。古代、神社は貴族の信仰によって護られて来たが、貴族の勢力がおとろえるとともに、中世からは一般庶民にその信仰を広められた。

熊野の山伏、比丘尼達が能登の村々を回って曼陀羅絵図の絵解などをし、信者を熊野神社に送り込んでいたのである。また、熊野比丘尼達は、民衆にわかり易い説教節という節をつけた物語りを語り聞かせた。この際に若狭の八百比丘尼の物語りも語

により撤去されたと稿本金沢市史市街篇第一に出ている。

以上は概ね日本農書全集二六「農業図絵・土屋又三郎」の図絵解説・清水隆久氏著によって記した。

られたのである。それが地方地方の巨木と結びついて、村の伝説となって残ったのだと思われる。

中島町藤ノ瀬の式内社藤津比古神社は、土地の人々から「新宮」と呼ばれて熊野の新宮が祭られている。中島町藤ノ瀬は旧羽咋郡鉈打村に属し、羽咋郡の旧熊野村に隣接し、熊野郷と呼ばれる熊野信仰圏内にあつたものと思われる。また、中島町中島通称やまんたんの熊野社に、八百比丘尼の古い木像が祭られている。村人達は、何百年も生き続けて来た大木に畏敬の念を持つと共に、八百歳も生きたといふ八百比丘尼の長寿にあこがれて語り伝えられたのである。

我々の生活を何百年も見守って来た巨木を大切に、生きた歴史として保存して行き度いものである。

参考文献 「中島町史」「NHK歴史ドキュメント⑧」

# 国指定天然記念物の写真

## 栢野の大スギ

昭和十三年十一月三十日指定  
 江沼郡山中町栢野町の兜  
 (所有者又は管理者) 菅原神社  
 幹周 九・六メートル  
 樹高 四五・六メートル



## 八幡神社の大スギ

昭和十八年八月二十四日指定  
 江沼郡山中町菅谷町への一四  
 (所有者又は管理者) 八幡神社  
 幹周 七・五メートル  
 樹高 三八・五メートル



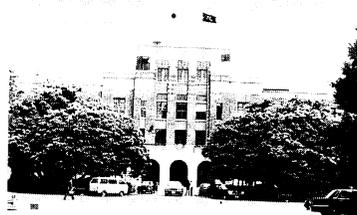
## 御仏供スギ

昭和十三年八月八日指定  
 石川郡吉野谷村下吉野  
 (所有者又は管理者) 吉野谷村  
 幹周 七・〇メートル  
 樹高 一九・〇メートル



## 堂形のシイ

昭和十八年八月二十四日指定  
 金沢市広坂「一」  
 (所有者又は管理者) 石川県  
 (左側) 幹周 七・五メートル  
 (右側) 幹周 七・五メートル  
 樹高 一一・〇メートル



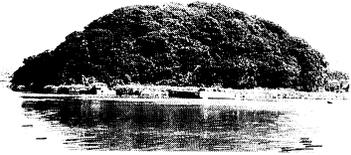
## 松月寺のサクラ

昭和十八年八月二十四日指定  
 金沢市寺町五一五―二二  
 (所有者又は管理者) 松月寺  
 幹周 三・五メートル  
 樹高 一五・〇メートル



## 鹿島の森

昭和十三年八月八日指定  
 加賀市塩屋町  
 (所有者又は管理者) 加賀市  
 常緑広葉樹林帯のタブーヘニシダ群落  
 周開 六〇〇メートル  
 標高 三三〇メートル  
 面積 三万平方メートル



## 気多神社社叢

昭和四十二年五月二日指定  
 羽咋市寺家町七の一  
 (所有者又は管理者) 気多神社  
 常緑広葉樹林のステージイの極相林  
 面積 三万平方メートル



## 須須神社叢

昭和五十年六月二十六日指定  
 珠洲市三崎町寺家ツ部菜上宗  
 (所有者又は管理者) 須須神社  
 常緑広葉樹林のステージイヤブコウ  
 ジ群落  
 面積 二万平方メートル



## 巨樹探訪の報告 I

野村 外喜子

県庁のシイノキの前へ集った人々



巨樹探訪のテレビのお知らせには、平成元年四月二十九日第一回みどりの日、九時に県庁のシイの木の前へ集合。午前は兼六園と本多の森、午後は金沢城跡となっていた。集合場所が単に県庁前というのではなく、シイの木の前というのが嬉しかった。

みどりの日の朝、二本の堂形のシイ(スタジイ)の木の前をうめた人は、二百名に近かった。まず、兼六園、本多の森へと出かけた。また午後集まった人は、二百名を越えていたと思う。人数が多いので、午後も二班に分れた。熟年の方は、里見信生先生のご説明で、金沢城内の植物園へ、健脚の方は古池博先生のご説明で、金沢城跡全般、尾山神社コースへと出かけた。私も健脚コースに参加した。途中、金沢大学構内を通りぬける頃、遊びに来ていた家族づれがつぎつぎと私達の班に合流し、巨樹探訪の列はますます長くなった。ここ金沢の植生の特徴は、常緑樹と落葉樹の発達する境い目であり、両方が混じった型になっている。金沢城跡でもその特徴がよく出ている。午後の巨樹探訪は、県庁裏と宮守坂の登り口(兼六コート横)にあるクスノキから始まった。金沢のクスノキは、植えたものと考えられる。普通、常緑樹と夏緑樹はまったく別の木のように思われているが、金沢でのクスノキには、その両方の性質がみられる。クスノキは金沢では例

年、春先には落葉するが、今年のように暖冬ではほとんど常緑のままとなり、古い緑葉と先のチョココレート色の若葉が同居している。

宮守坂を登って極楽橋を渡り、植物園の入口に差掛るあたりから、巨樹林が自然林のまま残っているところがところどころ見られる。ここでの常緑樹林の特徴は、スタジイ、モチノキが必ず見られることである。また林床植物として、ヒメアオキが必ず植っている。植物園にみられるキタコブシ、タイサンボク、ブナ、ソメイヨシノは植えたものと考えられる。ブナは、金沢では標高五〇〇メートルあたりから生育しており、戸室山のブナ林は、限界に近い自然林である。ブナは人の手が加わると駄目になってしまう自然度の高い環境にしか生育できないが、ここに生育していることは、大変珍しい。金沢城跡にみられる自然林(巨樹林)の群集は、(スタジイ、ウラジロガシ、アカガシ、ケヤキ、モチ、ヒメアオキ)、(ウワミズザクラ、タブ、ケヤキ、ヤブツバキ、ヒメアオキ)、(タブ、ケヤキ、カラスザンショウ、エノキ、ヤブツバキ、ヒメアオキ)、(アカガシ、モチ、タブ、スタジイ、ゲンケイザサ)等である。金沢では、普通タブ、ケヤキがベアになって生育している。このタブは、

水分の多い所を好む植物であり、タブの巨樹は崖のところに生育しており、昔はその下が堀であったと予想される場所に多い。例えば大手堀、百間堀の上、尾山神社の崖などにタブの巨樹がみられる。また、エノキはオレンジ色のおいしい実をつけ、森に鳥を住まわせている。カラスザンショウは、タブ林の前段階の植物である。

視野を地に向けると、巨樹林の下草、甚右衛門坂の上の斜面一面に咲くコシヤクの群生も素晴らしい。また、オドリコソウとヒメオドリコソウの群生も可愛い。

巨樹になるに要する年月は、その種によって異なるので樹の樹齢を決めることはむずかしいが、巨樹、老樹の中には三百年以上のものもある。三百年は人の寿命に比べ、大変長い。我々は、樹本来の寿命を保ってやらねばならないのではないだろうか。祖先が手を尽して育てて来たものを、我々も大切に育てていかねばならない。

樹が生きて来た三百年の物語を、心静かにきかせてもらわねばならない。すべての生物の生活に潤いを与えてくれる巨樹林に対し、そんな気持で接していかねばならないのではないだろうか。

(尾山台高校教諭)

# 巨樹探訪の報告Ⅱ

小谷 二郎

大盛況のうちに終了した午前の部に続いて、午後の金沢大学植物園コースも熱心な会員が多数参加し、これまた大変な盛り上がり様であった。

ここでもあまりの人数に二班に分れることになった。一班は古池先生率いる脚に自信のある人の集まり。二班は里見先生率いる脚に自信の少

ない人の集まり。私はまだ二十代であるが、二班に入ることになった。

冗談はさて置き、金沢大学植物園の特徴は、原生林を生かした植物園とでも表現できよう。市内でもめずらしい原植生の残るここ旧金沢城跡は、照葉樹林文化日本のおもかげを感じさせる森林構成をなしている。

シイ、カシ類を始め、ヤブツバキ、タブノキ、シロダモなどの常緑広葉樹を主体とした森は、よく見かけるスギ人工林や、コナラ、アカマツ二次林などに比べ、うっそうとしながらも、非常に安定している。中でもスタジイや、かみなりの被害で先端が折損した大きなモミなどは、県内でも有数の巨樹として知られているとおり、何か荘厳な雰囲気漂う。植物園には、こうした原植生に対し、樹齢一〇〇年といわれるソメイ

ヨシノや梟木のアテ、白山下で見られるトチノキなどに加え、外国産のものなど、それぞれ独特の生活様式をもつ木が植えられている。原生木と対照的な色彩を見ることができるとが大変おもしろく感じられた。訪れた会員達も、この一日で植物を見る楽しさを一層深めたことだろう。最後に、里見、古池両先生には、大変詳細な御説明を頂き心から感謝申し上げる。

(県林業試験場)

## 手づくりの音

— あり合せの木材で作ったチェロ —

森多 幸夫

オーケストラ・アンサンブル金沢の出演や、有名演奏家の来県、音楽団体の発表会など、いろいろの音楽グループの活動が活発になってきたことは、大変うれしいことである。

しかも、これらの演奏が、能楽堂や、村の展示館で、また、神社の拝殿などで行われ、聴衆をウットリさせたなどとの話を聞くと、ますます楽しくなる。そんな折、床下にころ

ヤキ、指板・魂柱・力木などはスギ、裏板横板はアガチス、表板ラワンをそれなりに整形してしっかりと接着した。裝飾やパフリングに工夫をこらし、ニス塗りも慎重に数回に及び、ようやく十カ月がかりで待望の「迷」器ができた。

の板が共鳴して、快いひびきがつたわってくる。能登のモミ、加賀のカエデをはじめ、トチ、ナラ、ホホノキ、マツなど、楽器としても魅力ある材料である。この調子なら、さらに技術の研鑽によって世界的名器ができるかも…。



がっている古材からふと思いついて、チェロづくり挑戦した。頭部のうずまきはアテ柱の端材、ネックはコタツ梓のホホノキ、糸巻き・緒止めは古電柱の腕木だったケ

最も迷った「形」は、結局、雑誌にのっていたイタリア・クレモナの巨匠A・ストラディバリの写真の寸法を拝借した。使用木材四・四七五立方センチメートルのうち、県産材は三四%、外材が六六%で、奇しくも全国木材需給比率とほぼ同じとなった。

まず試し弾きをする。鳴った！胸部分のなかでひろがってf孔からあふれてくるような力強い良い音だと感じたのだが…。感想を求められた息子は、比較するものがないので適当にニヤニヤしている。木材

(石川県林業公社)

# 百年木運動と巨樹の会

## 村上 貢

一、百年木と巨樹のかかわり  
 巨樹と言えば、誰しも樹齢百年以上の樹木を想像します。

百年木のイメージは、巨樹であります。

石川県が、百年木運動を推進しているおりに、はからずも石川県巨樹の会が誕生したことは、大変、意義があることと思います。

百年木運動は、民有地等に樹木を植栽して緑化の啓発に寄与し、巨樹の会は、民有地等の巨樹名木の育成、保存、治療に寄与するとともに、巨樹を通して古い文化や歴史を知ることとあります。

近年、市街化や都市の再開発により緑が減少しつつあるおりに、植樹を進める百年木運動と巨樹名木を保存する巨樹の会は、緑とうるおいのある環境づくりの車の両輪であります。

### (一) 百年木運動の目的

緑豊かな、やすらぎとうるおいのあるまちを、後世代の子孫に残す、「緑の財産」づくりであり、今後、

一世紀以上にわたって健全に育成して、緑化推進の象徴としたいと考えています。

ともすると、事業としてハード面が強調されがちですが、百年木運動を通じ、市街地等の緑化に対する県民意識の高まりを期待し、行政機関だけの運動ではなく百十五万人県民総ぐるみの運動として展開して行くことを目的としています。

### (二) 石川県巨樹の会の目的

冒頭でもふれましたが、豊かな緑づくりの一環として貴重な巨樹、老



幼児代表植樹

樹等の保存と、その環境整備並びに樹の文化等について調査普及活動を行うこととあります。

### 二、百年木運動の事業内容紹介

百年木運動は、石川県土木部全体の事業として、昭和六十三年度に企画されたものであります。

#### (一) 道路整備における百年木

ゆとりのある歩道整備事業として幅員を三・五メートルから五・〇メートルに変更増幅して、一・五メートルを植樹帯とし緑を確保します。

#### (二) 河川整備における百年木

うるおいとふれあいのある水辺環境づくりとして樹木や四季の花が咲く河岸の整備を進めます。

#### (三) 都市計画街路事業における百年木

道路の残地を積極的に取得し、うるおいのあるポケットスペースとして都市の中に緑の空間を設け、景観及び街路環境の総合的な改善を図ります。

#### (四) 百年木ランドマークづくり事業

県下の全市町村において、樹木によるランドマーク(土地の目印、地域の特徴的な景観)を創出しようという事業で、公園緑地課が主管します。民有地や公有地に県で高木を植樹し、「緑豊かな、うるおいのあるまちのシンボル樹」として県民の皆

さんに大きく育てていただくというものです。これら、(一)～(四)の総事業費は、平成元年度も六千五百万円となっています。

#### (i) 百年木運動に対する寄付金

この運動に「夢がある。もっと広げてほしい。」と共鳴する人や団体などから寄付が相次ぎました。

昭和六十三年度ではこうした寄付金約一千万円を当初予算に追加し、全体で一十三十二本の植栽することができました。

#### 三、「百年木」の植栽地募集

「百年木ランドマークづくり事業」では、百年木の植栽地として、民有地及び学校や保育所などの公有地を市町村を通じて公募します。

今年度は、百箇所植栽することとして、平成元年七月三十一日まで植栽地を募集しました、本事業は、今後も継続してすすめます。募集は随時受け付けており、お問い合わせは市町村役場で行っております。

#### 募集の重点事項

ア、民家の庭先や民間の事業所等の敷地、保育所、公民館、集会所を優先します。

イ、国道、県道、市町村道や広場に面したところに植樹します。  
 ウ、塀、垣などで囲われていない場所に植樹します。

(石川県公園緑地課)

## 巨樹と絵画

才田健治

巨樹を主題とした絵画、それは安土・桃山時代の障屏画に多く見られる。障屏画とは城や寺院などの大広間の、床の間から壁面へかけての大画面や屏風絵をいい、ことに安土桃山時代の、産金を反映し金箔を一面に貼った上に画かれた色彩的な絵画を金碧障屏画という。主題には多く松や松の巨樹がえらばれ、それに猛禽の鷹などを大きく配した画面に時代精神をあらわし、また桜、楓、梅などの色彩的表現にも桃山の豪華な造形性を示している。一方、禪寺の客間の襖などには宋元画の技法による梅の巨樹などの水墨画による表現もあった。

安土・桃山時代の絵画の巨樹の代表作は「松図屏風」(宮内庁)であろう。もとの襖絵を八曲屏風に改装したもので、画面の右手よりには巨大な松の幹が荒々しい直線性の筆致で画かれ、左右の枝がはみ出るように拡がり、濃緑や濃紺の岩絵具で彩られ、全体が力の表現で「伝永徳」作とされる。また「松鷹図屏風」(東京芸大)は金箔地六曲一双の左

右から巨樹の松の幹が対照的に出され中央へと延びる枝の左右に、大きく誇張して画いた鷹を配し、遠山や残雪が金雲(雲を抽象化し金箔地であらわした曲線形)と調和している。戦前の美校(東京芸大)では記念式などにこの屏風が壇上に飾られた記憶がある。

安土城や大坂城の障屏画は残っていないが、その倣を示すものは江戸前期に造営されたされた二条城である。黒書院の大広間の大きな床の間の壁一面に巨大な松樹が一本描かれ、それが向って右手の武者隠しから長押を越して右手の大壁から天井まで届いていて、その装飾構成は桃山芸術の延長線上にあることを示している。

一方、京都養源院の「松風襖絵」は写美的表現とちがって宗達図とされる松樹の装飾的な様式による一本の松の大樹が四面の大きな襖を通した構図で画かれ、元禄時代の尾形光琳の出現を暗示している。

しかし、大樹の松の新しい写美的表現としてのすぐれた作は、江戸後

期の円山応挙の「雪松図屏風」一双の大作である。右双には巨樹の松の幹が中央に大きく描かれ、左右に張り出した枝や幹には新雪が積っている。左双はやや優しい二本の松の新雪に、背景はいずれも金の砂子地で高雅を極め、日本人の心に沁み入る美しさをもっている。

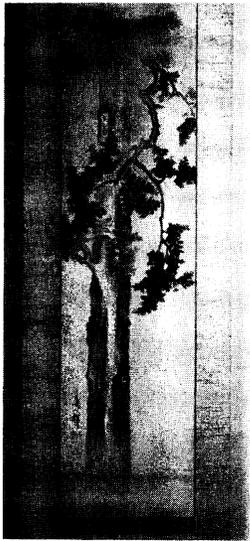
松や松について桃山障屏画に多い大樹の表現に、智積院の桜、楓の色彩的表現がある。現在は改装されているが、戦前には智積院で拜見出来た。桜と楓の巨樹が金地の画面のほぼ中央に相對し、左右に枝を拡げる永徳風の構図に、日本の季節の草花が咲き乱る色彩を配した桃山障屏画の美の頂点を示した作で、能登出身の長谷川等伯一派の作とされる。桜の巨樹の表現も、桃山障屏画に多い。京都大覚寺宸殿の牡丹の襖絵の裏側には、梅の大樹が濃厚な色彩

で八重の花をつけ、また天球院の襖絵には思い切った近代的に様式化された梅樹に雉を配し、聚光院の四面の襖絵の梅樹は永徳による水墨画の大作である。また、高野山の金剛三昧院の客殿には梅の老樹が大きく襖の四面にわたって横にかかれ、その部屋で泊めてもらった記憶がある。

最後に巨樹としての柳の表現がある。桃山後期から江戸前期にかけて「柳橋水車図屏風」が多く流行し「宇治橋図」ともいわれ、一双を通して橋と水車が大きく描かれ、左右と中央に柳の巨樹を配した構成である。金箔地に蒔絵のように絵具を盛り上げた工芸的な装飾性をもち類品も多い。大正期の金沢には駅前などに柳の巨樹が多く、そのかげで休んでいた人を思い出すこともある。(石川県文化財保護審議会委員)

## 檜巨樹図 — 文化頃の作 —

里見信生所蔵



檜の巨樹が天に向って直立する姿を描いている。作者は幕府の絵師住吉広行の弟子で、渡辺広輝である。広輝は阿波・淡路の領主蜂須賀家に仕え、藩の絵師として活躍した。

山笑う頃

杉江良治

たまたま、そうした機会に私自身が恵まれているのかどうかは知らないが、過疎化の進んだ土地を訪れると、それが運命であるかのよう「ナシ」に出会う。しかもその木全体に白い花を一齐に咲かせている姿である。

京都の大見でもそうであったし、炭山でもそうであった。そして北陸

昭和六〇年、国際森林年にちなんで、石川県造林課より映画制作を委託されました。企画会議の結果、県内の老木を幾つかとりあげて物語を展開してみようということになり、シナリオ制作にとりかかりました。このとき参考にさせていただいたのが、本会の里見会長編「石川県の巨樹」でした。

この映画は、白峰村の「太田の大杉」に始まり珠洲市の「さかさ杉」に至る三十本の巨木をとりあげ、これにまつわる伝説を（加賀編・能登編として三〇分の作品）物語風に描いたものです。物語の展開の方法としてその老木のある地元の小学校へ依頼し、老木の伝説を紙芝居にもらうという手法

をとりました。それによって、小学校から大人まで楽しめる映画になると考えた訳です。この映画の制作過程で各地の老木に出あって思ったことは、何百年という時間を生きてきたこれらの植物がもつ何とも不思議な霊気です。霊気という言葉は適切かも知れませんが、雰囲気とでも言いましょうか。人間でも長寿の方

映画「老木物語」

制作余談

水上裕規

は独特の雰囲気をお持ちのように、なにかそれに似た不思議な時間の限らない奥深さを感じたのです。もちろん植物に精神作用があるとは考えられません。こちら人間側の受けとめ方だとは思いますが、そういう感じを起こさせるところに老木の神秘性があるといえましょう。

に帰って来て訪れた奥医王の麓、杉尾の部跡でもまた出会うことになった。「ナシの花」の寿命は比較的短いと聞いているので、かなり私にとっては偶然が重なっているのである。

木枯らしがコナラやリヨウブなどの葉を散らせ、白っぽくなってしまのお互いの別れを惜しんでいたよう

なコシアブラの葉まで落ちてしまふと、山歩きの好きな私にとっては「長い長い」冬がやってくる。その年に出来なかった「標本」のことを考えたり、スケッチのあまりの少なさを後悔したりする毎日が続く。だから、コツバメ（蝶）自分の羽根を重そうに斜めに倒したような姿を見せる「春」がやってくると、待ち兼ねていた「山歩き」をはじめると。時はまさに「山笑う」頃である。煙ったように萌えたつ新しい緑に酔

撮影完了のその冬に、美川町の「小女郎松」（別の名、蓮如松）が雪で倒れ、やがて内灘町の「長平松」が虫に倒れ、あくる年、松任市の「青ならがしわ」が寄る年波に朽ちました。撮影の時は、あんなに元気だったのに……なんだか知人のおじいちゃん、おばあちゃんが亡くなったような気がして、とても淋しい思いにかりたてられました。モノ言わぬ樹木だけにとってもいい感じがします。

このように映画づくりによって私は老木たちと出会い、かつて味わったことのない体験をしました。以来巨樹と出会うたびに、「いつまでも元気でいてくれよ！」と声をかけたくなるのです。（北陸映像・プロデューサー）

いしれ、その年に生きられた春を神に感謝するのである。

「ナシ」に出会うのも丁度この季節である。かつては誰かがそこに「人生」の時を刻んでいたであろう場所に、今はただ「ナシ」だけが全木に花をつけ、辺りには静寂しかない。そういえば、私が「ナシ」に出会った日は、きまってよく晴れた日であった。青空を背景に咲く荒地の「ナシ」を感動に打たれながら見上げるとき、私は神の存在を身近に感ずるのである。

嗚呼 神の恵み 今年もまた

投稿規程

- 一、投稿者は会員に限る。ただし共同執筆者には、会員以外を含むことができる。なお会員以外に特別寄稿を依頼することがある。
- 二、原稿は原則として縦書きとし、二百字または四百字詰原稿用紙を使用すること。
- 三、原稿の取捨・体裁・校正などは編集者に一任のこと。
- 四、原稿についての照会、送付は事務局へおこなうこと。
- 五、原稿の締切りは、八月一日発行は五月底日まで、二月一日発行は十一月末日までとする。

## 巨樹の会へ入会して

田中英子

う。

私は新聞で拜見して、入会の機会を得ました。そして、いけばなへの仕事に情熱をかけつづけて来た幸を今しみじみとかみしめております。ふり返れば小学三年生の春でした。祖母に手をひかれて二キロの石ころ道を、小学校校門の向い側にあった伊藤医院へ伺ったものでした。先生は、校医でもあられて、学校でのその時々には「英ちゃん」と気さくにお声をかけて頂いたりして、はずかしかったものです。そして奥様が、茶華道の先生でした。祖母は挨拶の中で、この日を待っていたことを伝えていたのを覚えています。このときが、私の人生への第一歩であったのでしよう。

四月二十二日の総会へ出席出来たよるこびも、実は誕生日と重なっており、私にとりましては、忘れることの出来ない新鮮な一期一会になりました。その時頂きました日本杉見立番附表の東の前頭の中に、私のふるさとの「兵庫の妙見大杉」が明記されてありました。「やはり、あった!!」。私はうれしさに、再び身のひきしまる思いをいたしました。妙見の大杉をご紹介しますしよ

妙見山は山陰線八鹿町、水ノ山、後山、那岐山国定公園の一角に位置しています。妙見の大杉(国の天然記念物・大正十三年十二月指定)は、樹齢推定一千五百年、根元の周囲約一四メートル、高さ五七メートル、地上七メートル附近で幹が二分して

いるところから、別名夫婦スギとも呼ばれています。そこで、是非ご紹介したい三重塔のことです。大杉のそばにある三重塔(国指定重要文化財)は、室町時代の建物で、出雲大社に妙見杉を献納したお礼にゆずられたものです。けれども現在の建物は、昭和五十九年の豪雪で、破損し、復元したものです。

妙見の大杉から少々離れたところに、祖父が私の誕生記念にと植林してくれた杉林があります。父は大雪にも耐えるようにと、家族と共に樹を大事に守っていました。そして常に祖父母に見せたいとつぶやいていた姿が、私の人生の節目に支えられて来たように感じております。自然と人間の共生というのでしょうか、自然を理解しながら生きつづけたと思います。

金沢の巨樹探訪のときでした。里見先生が、巨樹の下では「どうかみなさん、樹にお話しかけてみて下さい。」と数回おっしゃって下さいま

## 巨樹は子孫からの預り物

中榮義威

林業を活性化し、山村の皆様にもふるさとの森づくりに力を入れてほしいものと、毎年地域毎に林業座談会が計画される。集まってくださる皆様は、かなり年配の方々がほとんどである。昭和六十二年の春先、珠洲市のある地区の林業座談会の折であつた。

「何をやっても儲からないから、先代から引き継いだ山を、金になる木を伐つてから息子にそのまま引き継ぐだけだ。」と口を揃えて言う。

私はしばらく何も言う言葉もなく都市化・国際化・巨大技術化の波にもまれて、今、山村は骨抜きになっていると実感しながら、思わず叫んでしまった。

「皆さん、山は子々孫々からの預かり物ですぞ。孫が可愛いかったら、孫の将来を考えて、できるだけのことをして、みやげを添えて返したらどうやいぬ。」

その後、六十三年の暮れ、金沢大学公開講座を受講した際、教育学部

した。そのたびに私は、熱い涙がこみあげてまいりました。短いことばの、なんと深いことばであったであろう……かと。

の地井昭夫教授の話の中の諺に感激した。それはアメリカ・インディアに伝わる「土地は、子孫からの預かり物である。」という諺である。

これにならつて言えば「巨樹は、子孫からの預かり物である」。子から孫へと順次代を重ねるにつれて、ふるさとの森には点々と千年木が村人を見守り、都市では百年木が生きて根を張ることができる。子々孫々にわたつて、山紫水明の国土で自然との触れ合いを大切にしながら、生き甲斐のある活力あふれる生活を築きむことができる。

コペルニクスの発想の転換でかなり世の中は前進すると思う。親としての責任を果たし、子孫から預かった物ができるだけ早く子孫に返す。そうすれば、国会議員も社長も若くなり、百年の大計も進む。また地球的自然環境問題も地域の積み重ねであることも見えてくるし、更に大切な事は、金より大切な物が見えてくる。(石川県林業経営課)

## 巨樹と私

緑と人間環境について関心が高まっているなかで石川県巨樹の会が設立され、今日、的を得た集まりであると考え一人であります。さて私なりに巨樹を思うとき色々のことがあります、最近雑誌で記憶にのこったものでCWニコルのキリストと植林について私信を付して考察してみたいと思います。世紀の始めレバノン周辺で布教活動をおこなったキリストは、当時中東一帯に優良船材として分布していたレバノンシイダー(形態的には檜の仲間)の造林を熱心におこなった。その結果、彼のいるところにはレバノンシイダーがあり、布教の目印としての役目を担ったようである。今日でも中東のキリスト教徒の旗印の中心部には、写実的なレバノンシイダーの絵が書かれている。大地を家とし緑を絨毯に自然の中で生きた彼は、その環境に感化されるものが多々あったと考えられる。当時彼の周りで巨木の森を造っていたレバノンシイダーは、彼にとつて唯一再生できる緑の一つであったとおもわれる。政治、経済をも動かしたこの木は、はからずも彼の命を絶つ台としても使われたが、彼はこの木の台より復活した。キリストが

## 坂井秀樹

植えた森林は今日見ることができないが、その意志は教会の形として。また、墓地の周辺樹としてキリスト教徒の心に今も生きている。私達日本人の白木文化(針葉樹林中心)と白人の木の文化(広葉樹中心)の違いもここから出てきている。

近世で巨樹と文明の関わりに最も激しく変化を見せた国としては、イ

巨樹や名木に接する度に、何か心の安らぎと畏敬の念を覚えるのであります。昔から人々が山岳や大海に神を感じたように、大自然の織りなす結晶であります巨樹に靈気を感じ、無言の励ましを受けるのは当然の事かも知れません。

吾が家の庭にあ  
る泰山木も年を経る毎に、巨人の相を備えつつあるような気がいたしました。泰山木は四、

五月より葉が落ち始め、落葉と花殻が七月一杯は続きます。小さな子供の時から毎朝落葉掃きをさせられるのに、ホトホト困って泣きたい思いをした事が、今でも忘れる事が出来ません。それが長ずるに従って、大きな木とは素晴らしい、

キリスではないかと思われる。一五

世紀エリザベス一世に率いられ、ユニオンジャックの旗の下世界一の大海軍を誇った船の材料はオーク(みずなら俗にどんぐりの木)である。オークなくしては、七つの海を支配することは、有りえ無かったと思われる。この時期以前イギリスの森林面積率は九五%、以後は急激に激減している。広葉樹の硬い特性はそれ

まで有ったレバノンシイダーの船団を駆逐し新しい時代を迎える先駆け俺もこのような人間に育ちたいと思うようになりました。

泰山木は雪に弱い脆い木であります、風雪に耐えて子供の思いを遙かに超えて、はるかに大きくなりました。到底子供の手の届かぬ存生になりました。そして早く

追いつけ追いこせと励ましを受ける気持を持つ様になりました。これが私の子供の時代の想出であります、

子供の頃  
竹内虎治

私の子女もまた同じ体験を強いられ、木に対し一種の憎悪と親しみ覚えた事と思います。

もう今は孫の時代です。子供の頃の想いを温めながら、毎日の落葉掃きが楽しみの一つであります。

(前柳田村々長)

となっていた。

巨樹。それは私達に「遙かなる時間への旅人」として過去、未来に誘ってくれる貴重な資源であり私達の時代の固有財産ではなく人類が付き合ってきた、また付き合っていくべき共存者である。我が国には鎮守の森、山全体としての信仰の対象としての巨樹が存在し得たし、今日においても何らかの形で存在している。ヨーロッパにおいてはキリスト教が布教される前までは復活祭として巨樹の信仰が有ったが、布教後その形はクリスマスツリーとして今日に残るのみである。彼らの森は狩猟をするために、御猟場として貴族などにより保護されてきた歴史をもっているが、私達の森は神が住まう森としての歴史の経過があり白人的考えに相れないものがある。自然保護を訴える一部の人間にはこの文化の違いを無視し、自然とのお付き合いを短時間でとらえ、局部的時間の感覚で強引に進める感があり寂しいかぎりである。山と暮らしを共にしてきた私の先代達は、ある意味では自然保護の先鋒者であり、口先ではどうしようもない自然をしっかりと考える。「巨樹」それは私にとっては血が流れている私であり、故に私自身と同様に尊い存在である。

(石川県林業研究グループ)

## 宝達山のブナ林

広正 一一一



宝達山のブナ林

能登の入口に位置する宝達山頂（六七メートル）には手速比咩神

社の奥殿（下社は押水町字東間）があり、押水平野の水源地として、漁師の航行目標として崇敬されてきた。

ところが、教年来奥殿の鉄骨の腐朽破損が甚だしく、神域にふさわしくないまでに損傷している。そこで太鼓下の有志の熱意により再建することになり、目下浄財を募りつつあり、近く着工の運びにまでこぎつけた。

この社の裏側と東斜面には美しいブナ林が小面積（約〇、三ヘクタール）ながら群生し、登山者の憩の場所となっている。その上、このブナ林の中心に美味しい湧水が出ており、俗に「冷た水」と呼ばれ昔から地域

の人に親しまれ、登頂の喜びを倍加させてくれた。

ところが、西斜面には全くブナの樹が見られないのが現状で、寂しい限りである。恐らく、晩秋から冬期にかけて、日本海から吹上げる強い季節風のせいである。

このほか、能登地区には、石動山、高爪山、高州山、輪島市寺山県有林等にも頂上の凹地に小敷ながらブナ樹を散見することができたが、年々減少している。

ブナ樹保護の立場から、土壌水分、風衝地、特に季節風の直撃を受けぬよう天然林の保護帯を必ず周辺に設けて、デリケートなブナ樹の保護育成に一層の配慮を願うものである。

## もっと大きかった

上島 保正

先日、私は、友釣りの師匠甚左の父ちゃん（中谷甚栄氏）から鮎釣りに誘われた。

久しぶりの川釣りであって、菅笠に偏光眼鏡、継ぎ竿にタモ、ガンガン（生簀）に親鮎、地下足袋にわらじの重ね履きという、格好だけはいっぱしの釣り師スタイルでのぞんだ。

初夏の河原田川は、深みを増した緑が川面を染めてキラキラ流れ、底石は鮎のハミ跡で真っ黒になっている。

二人は、早速上・下流に分れて、親鮎を流れに乗せながらポイントへ誘い込んだ。師匠を凌ぐと自負している天狗の竿に、やがてコトコトゴツゴツと掛け針独特の手応え、これぞ釣りの醍醐味である。道糸をゆるめずタモへ取り込むと、薄緑の魚体がピチピチ跳返る。五〇メートルも釣り進む頃には、十匹程も釣り上げた。

ところが、そこからは先行者がいたのか、さっぱり鮎が追わない。学校帰りの子供たちに、「お爺ちゃん釣れとよ」と声をかけられ、「二匹になるまで上げんや」「欲ばったら逃げられるよ」とからかわれる始末。「じゃ親でも替えて、もうひと頑張りするか」親鮎を付けたまま、

竿を河原において、ガンガンのあるところへ戻った。ガンガンは、釣った鮎を入れ手頃な石を乗せて、流れに沈めてある。

覚えの場所へ来たが、幾ら探しても見当たらない。視線をだんだん下流へ移すと、浅瀬にガンガンの底が見える。さあ大変。どうした訳か、止め金が外れて中は空っぽ。がっくりして目先が真っ白になった。

やがて気をとり直し、竿をおいたところへ帰ってみると、親鮎が深みへ潜っている。竿を立てると、掛け針が何かに掛ったのか上ってこない。そうっと引っぱったつもりだったが、鼻環だけが軽々と跳上った。「しまった、親まで逃がした」。

重ねがさねの失敗に、とぼとぼ師匠のところまで引返すと「どうした」「逃げられた」「誰が」「親も子もだ」。落ち込んでいる不肖の弟子を、不思議そうに眺めている。

その晩、釣果に満足気な師匠と囲炉裏を囲み、コナラの炭に赤々と映える鮎を見つめながら思った。「俺のは地鮎ばかりだったから、もっと大きかったぞ」。

(県緑化推進委員会)

## また見付かった巨樹(1)



カ ツ ラ

これまでの巨樹・巨樹林の調査などから、数多くの珍しい貴重な樹木が発見されてきましたが、まだまだ埋れて世に出ない巨樹があると思われれます。それらを見つけて出すのも本会の主要な事業です。

本会の発足と同時に、会員山口一男氏から白峰村の山中で発見したカツラとミズナラの写真を送ってきました。厚くお礼申し上げます。

提供者 山口一男(白峰村桑島)  
カツラ

所在地 白峰村桑島一〇号七―一四  
所有者 白峰村  
幹周 七四〇センチ

ミズナラ  
所在地 白峰村下田原ラーノ二  
所有者 山口紀夫(白峰村桑島)  
幹周 五七〇センチ



ミ ズ ナ ラ

## 一葉より

田中豊子

茶釜の胴に陽鏝された一枚の「かしわ葉」は、今春、金沢市制百年を記念して行なわれた展覧会で見た逸品である。

葉脈の線もあざやかな柏文様の平釜(初代官崎寒雄作)で、やわらかな肩線よりなる蛇口の柏釜で、水ぬきの穴も風情を添えている。

冷え冷えとした寒中の茶室、炭火で湯を沸す。やがて赤味を増した火と共に聞えてくる松風の音、火に照らされた胴の文様の「かしわ葉」は、なんともいぬ味わいがある。

「カシワ」は古来から「葉守の神」「諸木の君子」とも言われ、他の落葉より遅れて、春の芽出しの頃まで枝先に枯葉が残り、やがて新芽の生

長にともない落葉する。

かせた残り葉が春風に吹かれカサカサと鳴る音がせつなく、親が子に「元氣を出して頑張って大きくなれよ」と言うささやきにも思える。

私達の身のまわりにある美術品、什器、家紋等には、山川草木が多くの文様として取り入れられている。

日本の文様の特徴は、表現されたものに意味を限定せずに、むしろその背後に広がる世界を心象に呼びかけるもの……と「文様の博物誌」にあるが、まさに一つの文様は私達に無限の世界を与えてくれる。

瑞祥文(不老長生、富貴平安等)としては、松、竹、梅を筆頭として、柏、楨、杉などがあげられ、桐文様

(一九頁下段に続く)



### 石川県巨樹の会創立総会

四月二十二日(土)午後二時から  
金沢市石引四丁目白嶺会館(護国  
神社境内)において開かれた。

上島保正氏司会のもとに、まず里  
見信生氏が発起人を代表してあいさ  
つし、田中敏之氏の経過報告、次に  
井幡清生氏を議長に選び、規約案、

平成元年度事業計画案と予算案とを  
審議可決し、役員(二カ年)を別記  
の通り選出した。

このあと里見信生氏の会長就任の  
あいさつと三浦敏夫県農林水産部次  
長、石原周次県環境部次長の祝辞が  
あり、最後に里見会長の「石川県の  
巨樹―ケヤキ、スギ、イチヨウにつ  
いて」の講演があった。

出席者一一〇名。  
事業計画の概要

- 1 会誌「巨樹いしかわ」を年二回  
(八月、二月)発行して、巨樹  
(林)の保護普及をはかる。
- 2 「巨樹の探訪会」を春秋の年二  
回開催し、見学と親睦をはかる。
- 3 その他講演会、研究会等を随時  
行う。

### 石川県巨樹の会日誌

一月二十日 県林業会館にて石川  
県巨樹の会発起人会を開く。趣意書、  
規約、事業計画等について協議。十

六名出席。

二月二日 本会設立のことにつき  
NHKラジオを始め各新聞が報道。

二月三日 県社教センターにて県  
自然保護課主催・自然バンザイ講座  
に、里見信生氏が「石川の巨樹」の  
講演を行うと共に、本会設立と入会  
方を勧める。

四月六日 県林業会館にて第二回  
発起人会開催。規約、事業計画、役  
員。専門委員選出等について協議。  
十六名出席。

四月十日 本会の発足についてN  
HKテレビ放映。

四月二十二日 本会創立総会。出  
席者一一〇名。詳細は別記の通り。

四月二十九日 初めての緑の日に  
県自然保護課と本会が春季の「巨樹  
の探訪会」を催す。参加者延二八〇  
名。

五月一日 金沢市石引四丁目地内  
のマンション建設予定地にある大樹  
について、金沢市建築指導課と施主  
に対し、保存方を要請した。

五月二十四日 会報「巨樹いしか  
わ」の企画編集会議。出席理事五名。

五月二十八日 中島町小牧白山神  
社のスタジオと同町宮前の久麻加夫  
都阿良加志比古神社の大杉について、  
老樹診断を指導した。

七月十七日 林業会館で会報の編  
集会議。出席理事五名。

会員数 一般会員二四名。法人  
会員六名。(七月二十日現在)

### 主催行事お知らせ

巨樹の会講演会

日時 九月九日午後一時三〇分から  
場所 県社会教育センター二二号室  
演題 樹木をめぐる民俗

講師 県文化財審議会委員

文学博士 小倉 学先生

秋季巨樹探訪の会

月日 九月十七日  
場所 石川郡白峰村大道谷太田  
日本一に決った大トチ(幹周  
一二メートル、樹高二五メー  
トル)

集合 十七日午前八時三〇分までに  
県庁うしろのテニスコート前  
に集合のこと。ここより往復  
バスを利用する。

共催 本会と白峰村  
会費 往復バス賃  
二千五百円の予定

申込 参加希望者は八月三十一日ま  
でに、住所、氏名、とバスまた  
は自家用車(なるべくバス利  
用のこと)利用の別を記載し  
ハガキで事務局へ通知のこと

その他

一、自家用車の方は九時半までに白  
峰村役場に集合のこと。

二、中食は各自持参すること。ただ

しみそ汁は主催側で準備する。  
三、林道往復約二時間徒歩のため  
(自動車不可)、山歩き可能な服装  
で参加すること。

四、バスは定員四十名のため、定員に  
達し次第締切らせていただきます。

### 会員募集

〇一般会員三千円 法人会員一万円  
〇会員以外で「巨樹いしかわ」(年  
二回発行)の購読御希望の方は一  
口(五千円)以上の購読料をお願  
いいたします。

### 編集後記

巨樹の会の一粒の  
種、「巨樹いしかわ」  
第一号が蒔かれました。この種を文  
字通り巨樹に育てるのは、会員方の  
熱意の如何です。幸い第一号は充実  
した沢山のご投稿を得て、予定の一  
六ページを二〇ページとしなければ  
ならぬ、うれしい悲鳴をあげました。  
ところがそれにふさわしい編集方法  
であったか、ひそかに恐れています  
次第です。何卒ご叱正をお願いします  
(竹内 城)

### 巨樹いしかわ第一号

平成元年八月一日発行  
金沢市兼六元町十一番二十八号  
(山中 敏之方)

### 石川県巨樹の会

電話 〇七六一三二一〇五六一  
郵便局口座 金沢三三三二四九番